

二〇一四年度 入学試験問題

文学部A方式I日程・経営学部A方式I日程・人間環境学部A方式
GIS(グローバル教養学部)A方式

一 二 限 国 語 (60分)

〈注意事項〉

- 一 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。
- 二 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 三 志望学部・学科によって解答する問題が決まっている。問題に指示されている通りに解答すること。指定されていない問題を解答した場合、採点の対象としないので注意すること。

- 四 マークシート解答方法については下記の注意事項を読みなさい。

マークシート解答方法についての注意

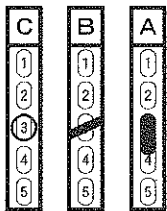
マークシート解答では、鉛筆でマークしたものを機械が直読読みとつて採点する。したがって、解答はHBの黒鉛筆でマークすること(万年筆、ボールペン、シャープペンシルなどは使用しないこと)。

- 一 記入例 解答を3にマークする場合。

(一) 正しいマークの例



(二) 悪いマークの例



枠外にはみださないこと。

○でかこまないこと。

- 二 解答を訂正する場合は、消しゴムでよく消してから、あらためてマークすること。
- 三 解答用紙をよごしたり、折りまげたりしないこと。
- 四 問題に指定された数よりも多くマークしないこと。

〔一〕 つぎの各問いに答えよ。

問一 つぎの中から言葉の用法に誤りを含んだ文を二つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 若いころから心臓を患っている祖母は、一病息災で昨年米寿を迎えた。

イ 深刻な経営難に陥った会社のために、社長は不倶戴天の決意で再建にあたった。

ウ 日頃はもの静かな調子で話す父親の警咳に初めて接し、私は彼の違う一面を見た。

エ 開業したばかりの高層電波塔には毎日大勢の人が訪れ、門前市をなす賑わいだ。

オ けんかの仲裁に入った友人は、側杖そばづえを食って殴られ、怪我をしたそうだ。

カ 実力派俳優である彼にとっては、大勢いる端役の一人など明らかに役不足だ。

問二 つぎの各作家の作品をそれぞれ一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

1 島崎藤村

ア 洪江抽斎

イ 蒲団

ウ 牛肉と馬鈴薯

エ 夜明け前

オ 暗夜行路

2 井伏鱒二

ア 杜子春

イ 高野聖

ウ 屋根の上のサワン

エ 生まれ出づる悩み

オ 銀の匙

〔二〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

数多くの戦争写真の傑作をのこし、自分も最後はインドシナ戦線で地雷にふれて死んだロバート・キャパは、私の好きな写真家だが、そのキャパが連合軍によるバリ解放のよるこびに酔いしれる民衆の姿をおさめた一連の作品の中に、『協力者』(A Woman Collaboratorist 1944)というタイトルのついた一枚の写真がある。髪の毛を剃られ丸坊主にされた若い母親が赤ん坊をしっかりと抱いたまま、街の通りを群衆に追われるようにして歩いてゆくあの写真——といえはすぐに記憶に呼び起される方も多いかと思う。

協力者とは、ナチスの協力者ということである。女は占領下にドイツ兵と通じてその子供を生んだ祖国の裏切り者であり、街が解放されたいま、同胞の手で捕えられて丸坊主にされ、見せしめに町中を引き回されているのである。女は苦しげに顔をゆがめ、腕の中で眠っているらしい赤ん坊にじっと目を注ぎながら歩いている。彼女の顔を、シーツの包みのようなものをかかえて、やはり目を伏せて歩いてゆく初老の男は、女の父親であろうか。二人をとりまく市民の表情はさまざまである。女の顔をもっとよく見ようとのぞきこんでいる者もいる。この報復に満足したように会心の笑みをうかべている者もいる。街路の両側に立ちならぶ建物の窓からも、大勢の人間がこの光景を見物している。それらの窓の一つには、勝利と平和の到来を告げる三色旗がたれている。……

もうずいぶん昔のことだが、東京のキャパ展に並べられたあの写真を見た時の衝撃を、私は忘れられない。たぶん、一生忘れることはあるまい。戦後の明と暗、といってしまうと、それまでだ。ファシズムにたいする抵抗運動のさかんだったフランスでは、こんな光景はさほど珍しくはなかったにちがいない。しかし、私は、そこにすぐさま、日本の「戦後」がふり回してきた反戦とヒューマニズムの合言葉を読みとって感動したというわけではない。私の感動の内容は、とてもひと口では言えない、複雑なものだった。私は職業軍人の息子であり、その写真になぞらえていえば、勝ち誇って唾をはきかける民衆の側にはいず、坊主頭にされて追い立てられる若い母親と何も知らずに眠っている赤ん坊の側にいると感じていたからである。

キャパがその時どんな気持ちでその写真のシャッターを切ったか、それにはいろいろと理屈がつけられるだろうが、私にとってはそれほど大事なことはない。私が感じたのは、もつと別のことである。いかにも正義漢らしい彼のナチスにたいする激しい憎しみ、ひいてはこの地上のあらゆる戦争にたいする彼の嫌悪の情は疑う余地がないとしても、それでもなお、この一枚の写真からくるやりばのない悲しみは何だろうか？——その時の私の複雑な想いの一端を、いま多少ともはつきりした言葉で置き換えるとしたら、そういうことになるだろうか。髪の毛をむざんに刈り取られた若い母親が傷ましいのでも、無心に眠っている赤ん坊が不憫なのでもない。人間がそんなふう人間を裁く、あるいは裁き得ると考えることが悲しい、ということだつたであろう。正しくなくとも人間は死んでしまわないかぎりには、どんなふうにしてでも生きて行かざるを得ない、ということでもあつたらう。

それが、当時は勿論、現在もなお依然として私の思想——思想というよりは、もつと漠然とした、もつと激しい、はげ口のない渦巻く感情のようなものだ。民主主義の高らかな謳歌。絶対多数の幸福の権利。民衆の正義という名の制裁。……キャパの一枚の写真に象徴される一つの時代、絶対の無謬むびやうを信じて疑わぬ人間たちの「戦後」が、私にとっては、一つの悪夢でもあつたのはむしろ当然のこととすべきだろう。それは、私が軍人のせがれだから感じることで、いわば単なる日蔭者の心情とすぎぬものだろうか。

いずれにしろ、キャパの『協力者』は、私には一枚の見事な報道写真という以上のものだった。俗に言うレンズの非情などというものを通りこして、私のような立場にいる人間をも釘づけにせずにおかなかつたというのは、やはりそれが傑作であるゆえんかもしれない。だがまた、そうした複雑微妙な真理を孕んだ現実にもかけて、文字通り一瞬の判断でシャッターを切る写真家とは、いったい何者だろうかという疑問が残るのもたしかである。

キャパはあくまでも一つの例にすぎないが、私は、そこに写真のような記録性のつよい芸術と、文学のような言葉の芸術との大きな違いがあるように思う。一瞬のうちに眼前の光景のすべてを定着させてしまう写真のあやうさと、どんなに僅かにしろ言葉による誇張や歪曲をまぬがれない文学のあやうさ。キャパは、もしかしたら、ナチス協力者の悲惨な末路と、民衆の正

義の怖ろしさとを、その一枚の写真にふたつながらおさめることを忘れてはいなかったかもしれない。しかし、「協力者」というこの永遠の人間悲劇は、ことに解放直後の一般的なセジヨウAウの中では、レジスタンスの英雄や連合軍兵士への民衆の歓呼の声にかき消されがちであつたらう。キャバが「事実」を歪めたわけでも歪められるわけでもない。時代というものは、いつでも事実の一面を強調することによって一つの見方をつくり出し、他のいくつもの面を見る目をくらましてしまう。人間に関する事実というやつは、それでもしなければ整理のつけようがないほど複雑怪奇なものだからである。そこで、例えば「協力者」という写真には、いかにもその写真むきの見方なり通俗的なキャプションなりが用意される。

文学は、しかし、報道写真にくらべれば、つねに民衆の歓呼の声とともにあるとはかぎらない。むしろ、反対の場合のほうが多いだろう。作家は、もし彼がその名にあたいする真の作家ならば、世間の常識というようなものにはさからつて、同胞の手で丸坊主にされた女やその私生児の運命にこそ目をむけるにちがいない。作家は、本来、この社会にうけ入れられる人間ではなく、またそうあるべきでもなく、彼のほうでもこの現実をたやすくうけ入れはしないからである。そんな人間にとって『協力者』のテーマぐらい食欲をそそるものはあるまい。

キャバの写真を見てからたぶん十年ほど後に、私は、やはり占領下のフランスの田舎町でドイツ兵と恋におちた二十歳の娘が、隣人たちの手で頭を丸刈りにされるエピソードの出でくる映画を見た。マルグリット・デュラが脚本を書き、アラン・レネエが作った『ヒロシマ・わが愛』(邦訳、二十四時間の情事)である。キャバ同様、これも古いものだから、もっぱらおぼろげな記憶にたよつて引用するわけだが、そのエピソードばかりが脳裡に残っているのは、その時またあのキャバの写真が思い出されたからかもしれない。

デュラは、そのシナリオの冒頭で(意図)として、「この映画を作るに当たつて、マルグリット・デュラと、アラン・レネエは、なんの愛国的または非愛国的な感情も持ちませんでした。二人は愛についての映画を作ろうと思つたのです。この愛についての映画のヒロインとして、解放のときヌヴェールヌヴェールで丸坊主にされた女性を選んだのは偶然ではありません。愛にまつわる最悪の状態、一般通念からは最も非難を浴びる、最もとがむべき最も許すべからざる状態を描こうと思つたのです。……」(大

島辰雄訳」と記している。また、シナリオ本文のその個所では、「彼らはフランスのどこかで誰かの頭を刈っている最中だ。こ²
こでは、それが薬屋の娘である。夕方の風がラ・マルセイエーズ（国歌）の調べを群衆にはこび、性急な、馬鹿げた正義のこの
作業をはげます。彼らには理知的であるだけのひまがない。……」²というふう²に書いている。

映画そのものは、当時としてはきわめて前衛的な手法によるものだったような覚えがあるだけで、いまここで論じる余裕も
ないが、このデュラの言葉を借りれば、キャパの一枚の報道写真があれほど私を感動させたのも、そこに一報道的事実を超え
る（愛）のすがたがとらえられていたからにちがいない。しかし、その時のキャパ自身に、デュラが言う意味での「理知的であ
るだけのひま」があつたかどうか、それは誰にもわからないことだし、歴史の転換の大興奮の中にいたであろう写真家にそこ
まで要求するのは見当違いかもしれない。いずれにせよ、一枚の写真が「事実」というもののむずかしさを教える。「真理」は、
たしかにその中に含まれている。だが、その所在については撮影者自身かならずしも確信がある場合ばかりではないだろうし、
写真を見る側も、ただただ事実のめざましさに圧倒されてしまうことが多いにちがいない。

³「事実」のむずかしさ。そのとらえどころのなさ。たとえば、日頃、私どもはドキュメンタリーという言葉をも気楽に使
っている。「ドキュメンタリーで描く」とか「一種のドキュメンタリーだ」とか。しかし、いまや日常の慣用句になつてこの
言いまわしぐらい、曖昧で、わけのわからないものもないようだ。正式な概念規定は知らないが、「ドキュメンタリーで描く」
といえ、世間一般の常識では、作りごとでない本⁴当の事実のありのままの記録、というぐらいの意味合いであろう。ところが、
ここにいう「作りごと」も「本⁴当の事実」も「ありのまま」も、わかりきつたことのようにいて、実際は何ひとつはつき
りしないことばかりなのである。

キャパの『協力者』は、たしかに一九四四年のフランスのある町における「本⁴当の事実」の記録写真であり、それを都合よく
撮影できるように彼が事前に打合せをしたり演出をホドコしたりしたものはあるまい。その意味では、これは「ありのま
ま」の再現である。ただし、それがあくまでもキャパの目から見た「ありのまま」にすぎないことは、同じ出来事を別の写真
家が取材すれば、かならずやキャパのそれとは似て非なる記録が出来上つたであろうことを考えてみただけでもたやすく想像

がつく。私のような写真のシロウトが考えても、あの場合、他にいくらでも撮り方があつただろう。丸坊主にされた女の顔を大写しにするとか、ののしる市民の激情の表出のほうにもっとアクセントを置くとか。その場合には、私の感動もいくぶんかは異なったニュアンスを帯びたかもしれない。だが、キャパはそうしなかつた。そこが彼の報道写真家としての立派さだということもできるだろう。しかし、彼がそこにレンズを通してとらえたかぎりのものはすべて、「本当の事実」にちがいないとしても、なおそこに完全に欠落しているものがある。——女の目にうつるキャパの姿である。キャパが見たものが事実であつたのと同じように、自分を撮らうとして路上に待ちかまえる一人のカメラマンの存在は、彼女にとつての厳然たる事実であつたろう。当然のことながら、『協力者』に再現されているのは女の目からみた現実ではない。『協力者』はあくまでキャパの『協力者』であつて、協力者の悲劇そのものではない。

写真にかぎらず、一般に記録というものが事実の重さを伝える例は枚挙にいとまがないが、反面、それがさ⁵も絶対不動の真理の証拠物件でもあるかのやうに世の中をまかり通ることのこわさについては、私どもはかなり疎いのではないかという気がする。誰しも日頃、他人にたいして、「事實は事実だ」という脅迫的^Cげんじを弄しがちだが、これも裏返せば、「事實は、事実にすぎない……」ということである。一方が反駁^{はんぱく}の余地のない結論としてふりかざすものが、他方ではいくらでも疑惑を生じ得るといふことこそ、人間に関する「事実」の本来の性質であり、文学といふやうなものが現実にたいして力を揮い得る根拠でもある。

ところが、写真にたいしては、私どもはなかなかその「事實は事実だ」式の迷信を払拭しきれない。というのも、カメラは誰かがシャッターを押したつて一応同じものが写るのは道理だし、そのカメラも、それ自体では百台が百台とも同一の機能をそなえた機械にちがいない。機械にはサクイ^Dのあろうはずがなく、したがつて画面に再現されたものにも嘘が介入する隙のあろうはずはない。……という単純な錯覚によるのであろう。この種の信仰があればこそ、一枚の写真が犯人逮捕の決め手になつたり、情事の現場を盗み撮りしてゆすりのネタに使う人間が出てきたりするのだから。猜疑心が旺盛なはずの現代の私どもが、とかく写真には一も二もなくやられてしまうといふのも、「事実」といふ麻薬の抗しがたい魔力のせいにはちがいない。

(阿部昭「忘れられない一枚の写真 映像文化論」より)

問一 波線部 A、D のカタカナを漢字に直して解答欄に記せ。

問二 傍線部 1「私の感動の内容は、とてもひと口では言えない、複雑なものだった」とあるが、キャパの『協力者』が筆者に与えた「感動の内容」として適切でないものをつぎの中から一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア ファシズムと戦争を憎み平和を愛するキャパの正義感にたいする理解。

イ 終戦後の解放の喜びとナチス協力者への報復に沸くパリの民衆にたいする共鳴。

ウ 正義の名においてなされる人間の行動の残酷さにたいするやりきれなさ。

エ 被写体の母親と赤ん坊のいかんともしがたい境遇にたいする思い入れ。

オ 過ちを犯したと非難されても生きてゆかざるをえない人間にたいする悲しみ。

問三 傍線部 2「彼らはフランスのどこかで誰かの頭を刈っている最中だ」とあるが、ドイツ兵と恋におちたフランスの娘が同胞の手によって頭を丸刈りにされる情景について、デュラがシナリオでこのように表現した意図として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア この情景が、フランスのいつ、どこで、誰にでも見られるありふれた光景であることを示すため。

イ この情景に関して、場所や人物を限定せず、映画製作者の判断にゆだねることを伝えるため。

ウ この情景が、当時の状況のなかでは、どんな娘にも起こりうる出来事であったことを表すため。

エ この情景を描くアイデアは、本当は作者のデュラ自身の経験から生まれたということを隠すため。

オ この情景に登場する悲惨な目にあつた女性の人権を、あえて匿名にすることによって守るため。

問四 傍線部3「事実」のむずかしさ」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 現実とは複雑で微妙なものであり、一つの事実を事実と判定するのは、世間一般の常識によるしかないということ。
- イ 何が事実で何が事実でないかということは、当事者には判断がつきにくく、後世が判定するしかないということ。
- ウ 事実には圧倒的な力があるので誰もそれを疑わないが、その事実が虚偽を含むものであることがあり得るということ。
- エ 事実とは曖昧なものであり、ある事実がそのままに見えても、実際には作りごとである疑いが拭えないということ。
- オ 一つの事実でも視点を変えれば別の様相が見えてくることがあり、事実の真の姿は一概には決められないということ。

問五 傍線部4「それがあくまでもキャパの目から見ただけありのままにすぎない」とあるが、筆者がそのように考える根拠をつぎの形式に従って、二十五字以上三十五字以内でまとめ、解答欄に記せ。ただし、読点や記号も一字と数える。

キャパの『協力者』は、

ということ。

問六 傍線部5「さも絶対不動の真理の証拠物件でもあるかのよう」に世の中をまかり通る」とあるが、事実の記録や写真の持つこのような性質にたいする人々の心情を比喩的に表現した二文字の熟語を、本文中より抜き出して解答欄に記せ。

問七 破線部「私は、そこに写真のような記録性のつよい芸術と、文学のような言葉の芸術との大きな違いがあるように思う」とあるが、筆者は写真と文学の違いをどのように考えているか。最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 写真はそこに写つたものを事実として提示するが、文学は事実を疑うことによって、新たな見方を提示しうることがある。

イ 写真は報道的事実を伝えることを第一義とするが、文学は世間の人々の非難を浴びるような事柄をこそ優先的に主題とする。

ウ 写真は撮る側の主観によって事実を恣意的に切り取るが、文学は一般に書き手の想像力によって事実を誇張して創作するものである。

エ 写真は事実という一般通念を具現化した記録による芸術だが、文学は世間の常識にさからう性質をもつ創作による芸術である。

オ 写真は撮る側の視点しか持ちえないが、文学は一面的な判断を避けるため、撮られる側の立場にたつことを使命とする。

問八 つぎの各文について、本文で述べられている筆者の心情や考えと合致するものにはa、そうでないものにはbの記号を解答欄にマークせよ。

ア 筆者は職業軍人の息子であったため、キャパの『協力者』を、自分の父親や自分自身の罪を弾劾する悪夢のようなものとしてとらえ、恐怖を感じている。

イ 筆者は、あえて世間の常識にさからうという文学者としての矜持をもって、民主主義や絶対多数の幸福の権利といった一般的に正しいとされる認識に疑義を呈している。

ウ 筆者は、『協力者』という写真と『ヒロシマ・わが愛』という映画が、ともにナチスの側に身を寄せた女性への糾弾をテーマとしている点を、批判的に見ている。

エ 筆者は、写真家の一瞬の判断で一つの光景を写し取る写真にたいして、事実についての一つの見方を見る側に否応なく与えてしまうという点で、あやうさを感じている。

オ 筆者がドキュメンタリーという言葉にたいして持つ違和感は、それがありのままの事実を描きだせるという一般的通念にたいする疑念に起因している。

〔三〕 つぎの文章は、『松浦宮物語』の一節である。遣唐副使として渡唐した橘氏忠は唐帝に厚遇され、その崩御後は、幼い新帝と政務を補佐するその母后に忠義をつくした。官職に就いている氏忠は、先例により本来は帰国できないが、両親の待つ日本に帰ることを切望するようになり、それを知った母后はその功績に報い、氏忠の帰国を決定した。別れの日が近づき、名残を惜しむ三人の様子を描いた以下の場面を読んで、後の問いに答えよ。

六月十日余りにもなりぬ。暑¹と¹ころせきころ、政^{まつりごと}はてぬるに、ことに疎^{まづり}き人もさぶらはず。帝^{みかど}、后^{きさき}、少しうち休ませたまふとて、水に臨みたる廊の、風涼しきかたにおはしますに、召しあれば参りて、土^{つち}廂^{むら}の石の上にさぶらふ。^A「思ひしことなれど、むげに残りなき日数こそ、いまさら言ふかひなき心地すれ」と涙ぐませたまへる、いとかたじけなく忍びがたきに、后も近うおはします。六月十日余り、暑く耐へがたき日の気色^{けしよ}を、薄き衣も暑かはしう、思ひ悩まぬ人なきころの、まばゆきま^Bでくまなき空の気色に、常よりことに言ふよしなき御さま、かたちの、光を放つと言ふばかり、目も驚く心地するに、いささか暑げなる御気色もなく、みどりの空に澄み昇る月の影ばかりきよく、くまなき御さま、「この世にかか^aることやはあるべき」と、あさましう言ふ限りなきに、ただ仏の御国の心地のみして、なめげなれど、「目しばらくも」とかや、恐れも忘れてうちま²もらるるにつけて、思ひ分かず、涙のみぞすすみ出づる。いまはただ、このとまらぬ道の恨み、なほかへすがへすも忘れがた³き志^{こころざし}を、のたまはせやらす、みなしほたれおはします。

〔幼帝〕「このついででありて、鄭衛^{ていゑい}の声を好まねど、礼樂の道捨つべきにはあらねば、聞き合はせまほしかりつる物の音をだに、金石糸竹^{きんせきしちく}をなべてやめたるころにて、くちをしうも過ぎぬるかな。なほ早き月日の一巡りをだに、待ち過ごさざりつる恨みなむ、なにの深さも忘れぬべかりける」とのたまはすれど、深く思へるところを違^{たが}へじの御掟^{おきて}なれば、いとぞかひなき。〔幼帝〕「なほこの度は、待^{*}つ人もあながちに深き志背^{こころそむ}きがたければ、頼みがたきあだの命なれど、かのふたりののちまで、おのづから長らふる身ならば、いま一度は、思ひ立たれなんや。かくながら、惜しみとどめたらむよりも、それや深き志のほど知られん」とのたまはする御兼^{かみ}ね言^{こと}も、涙にむせびて、え聞^cこえやらす。

(福氏忠) 限りあらむ命を更に惜しみても君の御言をいかが忘れむ

(幼帝) これゆゑぞ我も命の惜しまれむただなほざりに頼めおくと

「さらば長らふる身ともがな」とのたまはする御気色も、いとおよすげて、けうらにぞおはします。

(『松浦宮物語』より。文章を一部改変した)

【注】 * 鄭衛の声

中国の春秋時代の鄭と衛という国の音楽を指す。人心を惑わすものとされていた。

* 金石糸竹をなべてやめたる

「金石糸竹」は音楽の意。先帝の崩御後、喪に服しているため、音楽をすべて禁止しているという意味。

* 待つ人

氏忠の帰国を待っている両親を指す。

* かのふたりののち

「氏忠の両親の亡くなったあと」という意。

問一

傍線部1「ところせき」2「なめげなれど」3「けうらに」の本文中における意味として最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

1 「ところせき」

ア やっかいである

イ ぶり返す

ウ 過ごしやすい

エ 和らぐ

オ 連日続く

2 「なめげなれど」

ア 呆然とするが

イ 清々しいが

ウ 落ち着かないが

エ 失礼であるが

オ ありがたい気持ちになるが

3 「けうらに」

ア 美しくて

イ かわいらしく

ウ おとなびて

エ 聡明で

オ さびしそうで

問二 傍線部A「さぶらふ」B「たまへ」C「聞こえやら」の敬語の種類として最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 尊敬語

イ 謙讓語

ウ 丁寧語

問三 二重傍線部a「かかることやはあるべき」を現代語訳し、三十五字以内で解答欄に記せ。その際、「かかる」が何を指しているかを明確にすること。なお、読点や記号も一字と数える。

問四 波線部「いとぞかひなき」とあるが、なぜどうすることもできないのか。その理由として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 氏忠がいくら両親への思いを深くしても、先例により、すぐには帰国できないから。

イ 母后の、帝に対する愛情を尊重して定められた規則なので、臣下である氏忠には反論する余地はないから。

ウ 「氏忠と音楽が聴きたい」と帝が強く願っても、亡き父帝の喪に服する決まりに違反することはできないから。

エ どれほど母后に恋い焦がれても、身分が違うので、氏忠の思いが叶うことは絶対にありえないから。

オ 氏忠の帰国は、彼の強い願いを汲んでそれに背くまいと、母后が取り計らわれたことだから。

問五 二重傍線部b「君の御言」の内容として、最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 氏忠の功労は一生忘れないよ。

イ 再び唐に来ると決心なさらないか。

ウ 帰国について、もう一度考え直してください。

エ 帰国後は、以前のように、また両親に孝行をつくしておくれ。

オ 唐と日本に離れても、ともに長生きをし、互いに忘れないようにしましょう。

問六 『松浦宮物語』を著したとされている藤原定家は勅撰和歌集の撰者でもある。つぎの中から勅撰和歌集ではない歌集を一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 千載和歌集
- イ 後撰和歌集
- ウ 古今和歌集
- エ 金槐和歌集
- オ 新古今和歌集

つぎの問題〔四〕は、文学部を志望する受験者のみ解答せよ。

〔四〕 つぎの文章は、盛唐の詩人王之渙の「涼州詞」に因む逸話である。王之渙が、詩人仲間の王昌齡・高適とともに酒場で飲んでいると、梨園（宮廷の歌舞演劇を学び演ずるところ）の楽人や妓女たちがやつてきて、宴会を始めた。三人は席を隅に避けて、彼女らが誰の詩を一番多く歌うかで、三人の優劣を決めようとひそかに相談した。すると王昌齡と高適の絶句が歌われるが、王之渙の詩だけは歌われない。それに続く以下の場面を読んで、後の問いに答えよ（設問の都合上、返り点・送り仮名を省いた箇所がある）。

王之渙自以得^レ名^ヲ已久^一、因^{リテ}謂^ニ諸^人曰^{ハク}、此輩皆^ハ潦倒^ニ樂官^ニ所^ハ唱^フ、皆^ハ巴人下里之詞耳、豈陽春白雪之曲、俗物敢^レ近^シ哉。因^{リテ}

指^{シテ}諸^二妓中之最佳者^一曰^{ハク}、待^ニ此子^一所^ラ唱^フ、如^ク非^ズ我詩、吾即終身

与^シ子争^フ衡^ヲ矣。如^ク是吾詩、子等^ハ当^ニ須^ニ扨^ニ列^ニ床^ニ下^ニ、奉^シ吾^ヲ為^ス

師^ト。因^{リテ}歡^シ笑^シ而^{シテ}俟^ツ之^ヲ。須^ニ臬^ニ次^ニ至^ニ双鬢^ニ發^ス声^一、則^チ曰^{ハク}、

黄河遠上^ル白雲間、一片孤城^ハ万仞^ハ山

羌笛何須怨楊柳
春光不渡玉門關

之渙即擲一子曰田舍奴我豈妄哉因大諧笑。

(薛用弱『集異記』より。文章を一部改変した)

【注】

*潦倒

落ちぶれたさま。失意のさま。

*巴人下里之詞

蜀の国の田舎で歌われたような卑俗な歌。

*陽春白雪之曲

楚の国で歌われたような高雅な歌曲。

*争衡

天下の権力を争うこと。

*双鬟

若い女性の髪型で、左右二つの環状に結び上げたもの。またその髪型の女性。

*黄河……

王之渙の「涼州詞」で、大意は、「黄河が遙か彼方、白雲のあたりまで上つて見えるように見え、高くけわしい万仞の山の中に、ぼつんと一つ城砦が築かれている。羌(唐の北西の異民族)の笛の音が聞こえてきたが、別れの曲「折楊柳」を悲しげに吹くまでもない。この国境の関所、玉門関(現在の甘肅省敦煌)には、春の光も届かず、柳が芽吹くこともないのだから」。

問一 傍線部①「俗物敢近哉」とあるが、その解釈として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア こんな下賤な人物たちには、決して近づくべきではない。

イ 蜀の田舎で歌われるような俗謡などに、親しんではならない。

ウ こんな俗人どもが、高雅な曲を歌うはずがない。

エ 蜀の田舎の歌など俗っぽくて、楚の高雅な曲とは、まったく異なる。

オ 我が輩のような俗人に、高雅な曲などまったく不似合いだ。

問二 傍線部②「如非我詩」の「如」と同じ意味の「如」を含む文をつぎの中から一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 其仁如_レ天、其知如_レ神。

イ 知_レ之、不_レ如_レ好_レ之、好_レ之、不_レ如_レ樂_レ之。

ウ 陳將軍如_レ漢、始謁_二高祖_一。

エ 如_レ有_二一朝之患_一、則君子不_レ患矣。

オ 月白風清、如_二此良夜_一何。

問三 空欄 A に入る語として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 不敢

イ 豈不

ウ 敢不

エ 不必

オ 安不

問四 傍線部③「当須拝列床下、奉吾為師」の書き下し文として、最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 当に須らく床下に拝列し、吾を奉りて師と為すべし、と。
- イ 須らく床下に拝列するに当りて、吾を奉りて師と為すべし、と。
- ウ 当に須らく床下に拝列すべきにして、吾を師の為に奉らん、と。
- エ 床下に拝列するを須るるに当りて、吾を師と為すを奉らん、と。
- オ 須らく床下に拝列すべきに当りて、吾の師と為るを奉るべし、と。

問五 傍線部④「我豈妄哉」とあるが、王之渙は、どのような心情でそう言ったのか。つぎの形式に従って、十五字以内で解答欄に記せ。ただし、読点や記号も一字と数える。

心情。

つぎの問題〔五〕は、経営学部・人間環境学部・GIS（グローバル教養学部）を志望する受験者のみ解答せよ。

〔五〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

自由にものを考えることは、非常に高度な頭脳活動である。この世にないもの、ありえないもの、まったく無関係なもので、突然頭に思い浮かべることが出来る。それらをつぎつぎ取り出して、使えるか使えないかを取捨選択していく。これが、アイデアを思いつくプロセスである（言葉にすると、こんな味気ないものになる）。

このプロセスのうち、後半の「使えるか使えないか」を確かめる思考は、計算であり、論理的な推測である。この作業は、本人ではなく他者、複数の人たちの協力を得ることもできるし、ほとんどの場合、コンピュータによる支援が可能だ。一人の頭脳でやるよりもその方が速い。しかし、前半の発想する作業は、個人の頭脳でしかできない。事情を正確に理解した他者がいれば複数で議論をしたりすることも可能だが、発想するのはあくまでも個人的な行為である。

手当たり次第ランダムに思い浮かべるのではなく、近いもの、似ているもの、というようなイメージで見回していく。すなわち、使えそうなものは、頭の中では「近い」場所であり、「似ている」ものなのだ。この場合の「近い」というのは、世間一般のジャンルではない。その人の頭の中で近いところに置かれている、という意味である。また、「似ている」というのも、形なのか色なのか、機能なのか、わからない。その人が捉えるイメージの雰囲気類似しているのである。

いろいろなものを抽象的に捉える人は、日頃から、抽象的なものを見ているから、頭の中に、それらがぼんやりとした広がりをもって収まっている。ぼんやりとしているため、ほかのものと同リンクしやすい。なんとなく、あれが近そうだ、どことなく似ていないか、というように連想され、A、頭の中から引つ張り出されることになる。発想をする以前にも、この種の連想を繰り返しているのだ、なんとなく関連のあるものが、「近く」に置かれ、「似ている」ものとして認識されている。だから、いざというときに取り出せるのである。

多くのアイデアというものは、こういう理屈のない、筋道のない発想によって生まれる。これは、物理学や数学の偉大な発見においても、同じだっただろう。あとになって、「樹から落ちる林檎りんごを見て気づいた」というように、ヒントとなった理屈が語られるけれど、林檎はまったく無関係なものだ。ただ、単に、たまたまニュートンの頭の中で、それが「近く」に落ちたのである。

ときどき、「人の考えないことを考える」などと無理なことを言う人がいる。優れたアイデアが、誰も考えもしなかったものだから、このようなもの言いになるのだろうけれど、そもそも、そんな「やろうと思つてできる」ようなものではない。なにしろ、「手法」もなく、頭の中でも道筋はない。ただ突然、ふと成し遂げられているものなのだ。

抽象的思考には、具体的な手法というものは存在しない（そもそも相反している）。日頃から、抽象的にものを見る目を持っていること、そうすることで、自分の頭の中に独自の「型」や「様式」を蓄積すること、そして、それらをいつも眺め、連想し、近いもの、似ているものにリンクを張ること、これらが、素晴らしいアイデアを思いつく可能性を高める、というだけである。

B、短期的な努力や練習によつても、すぐに「思いつける頭」になれるわけではない。長い時間をかけて、少しずつ自分が変化するしかない。たつた今からそれを目指し、いつも意識して、抽象的に考えよう、と自分に言い聞かせていなければならぬ。非常に面倒なことなのである。ただし、それを続けていると、自然に頭が馴染なじんできて、だんだんできるようになる。人間には「慣れる」性質があるためだ。

なにか関係のあるものを思いついて問題を解決するというのは逆の方向性になるけれど、ふと思いついたことを、将来なにかほかのものに応用できないか、とそのつど考える癖を持つことも大事だ。目の前に問題がないときでも、使えそうなものをストックする。そんな思考の「備え」というべき習慣を持つと良い。

C、庭仕事をしていて、自分が大事にしている植物のために肥料をやつていけるとする。肥料をやるとたしかに生育が良くなる。やりすぎもいけないが、適度な量を、適切なときに与えると効果が大きい。その適切なときというのは、その植物がもともと生長するシーズンにはかならない。つまり、植物が休んでいるときや、勢いがなくなったときに肥料をやつても

効かない、ということが観察できる。こういう経験をしたとき、植物の育て方だけではなく、このような傾向がほかのものにも見られないか、と考える。たとえば、仕事ではどうだろう。業績が上り調子のときに、なんらかのカンフル剤的なものを投入すると効果があるが、業績が下がってきたときに、同じことをしてもたぶん駄目だろうな、と想像することができる。

将来、仕事で上り調子になったそのときに、この自分が考えた教訓を思い出せば、そのとおりかどうか確かめることができるだろう。

D、業績が悪化したときに、新しいアイデアを考えると言うことの理不尽さも、なんとなく予感できる。新しいアイデアは、もっと早く業績が良いときにこそ出すべきだったのである。忙しくて儲かっているときに、次の手を打てたビジネスが生き残る。

このように、抽象的な考え方をする人は、何をやっても、どんなつまらないことでも、なにか役に立つことを見つけるようになる。見つけたことがあるから、役に立ったことがあるから、また見つけようとしているともいえる。

ときどき、ビジネスで大成功しているのに、私生活では遊んでばかりいる人がいる。端から見ると、それほど仕事熱心には見えない。そういう人は、「遊ぶことで仕事の活力が得られる」とか「遊んでいるときに、新しい仕事のアイデアを思いつく」とどと語ることが多い。これなどは、抽象的な頭を持っているから、そういう別分野での発想を活かせる、という意味なのである。

現代社会は、²溢れるばかりの情報が降り注ぎ、人はこれに埋もれてしまっている状態である。広い範囲の具体的な情報に、誰でもいつでも簡単にアクセスができるようになった。知りたいと思ったときに、すぐに知ることができる。ただし、知りたいたいと思っていないものまで、無理矢理知らされてしまう、という事態に陥っている。また、いったい何が本当なのか、ということがわからない。その理由は、これらの情報が、どこかの誰かが「伝えたい」と思ったものであり、その発信者の主観や希望が必ず混ざっているからだ。濁りのないピュアな情報を得ることは、現代の方が昔よりもむしろ難しくなったといえるだろう。したがって、「知る」という行為だけでは、なかなか客観的な視点には近づけない。さらにまた、非常に³瑣末な知識に大勢が囚われている。そういう身近で具体的な情報に価値があると思いつままされている、といっても良い。実は、それらは身近な

ものように偽装されているだけで、「具体的な情報を知らない」と損をする」と恐れている人たちに付け入っているのである。自分が得た情報を、別の情報と照らし合わせたり、理屈を考えて、どうしてこういったものが伝わってきたのだろう、といちいち考える人も少ない。そんな暇はないのかもしれない。しかし、ちょっと考えてみれば、「これはできすぎている」「嘘かもしれない」と疑うことができるはずだし、その情報の陰に隠れている動機、相互関係といったものを類推することもできる。もちろん、真実はわからないが、自分なりの解釈を持つことで、もの見方は変わってくるだろう。自分なりのもの見方を持っていることが、客観性や抽象性を育てる。

(森博嗣)人間はいろいろな問題についてどう考えていけば良いのか(より)

問一 傍線部「個人的な行為」とあるが、なぜ「個人的」といえるのか。その理由として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア アイデアのヒントを得ることは、通常は事情を正確に理解した他者との議論によるものだが、その前提となるのは議論に加わる一人一人がもつ着想であるから。

イ アイデアのヒントを得ることは、論理的な連想により、個人がこの世にないもの、ありえないものを想像する非常に高度な頭脳活動であるから。

ウ アイデアのヒントを得ることは、理屈や筋道によらないひらめきによるもので、他者と問題を共有し、論理的に議論して進められるようなことではないから。

エ アイデアのヒントを得ることは、意識的に「やろう」と思っていることではなく、ただ突然、ふと成し遂げられるもので、他者が関与する時間的余裕はないから。

オ アイデアのヒントを得ることは、他者の協力のもとで行うことも可能であるが、そうすると他者への配慮によって客観性や抽象性が失われてしまうから。

問二 空欄

A

に入る比喩表現として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 紐ひもにしるしがあるように

イ 紐のもつれを解ほどすように

ウ 紐と紐を絡ませるように

エ 紐が自然に伸びるように

オ 紐をたぐり寄せるように

問三 空欄

B

D

に入ることばとして最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア しかし

イ したがって

ウ いいかえれば

エ あるいは

オ たとえば

カ かりにも

問四

傍線部2「溢れるばかりの情報

が降り注ぎ、人はこれに埋もれてしまっている状態である」とあるが、筆者はその状態から脱却するためにはどうすることが必要であると考えているか。つぎの形式に従って、三十五字以上四十字以内で解答欄に記せ。ただし、読点や記号も一字と数える。

広い範囲の具体的な情報が溢れるばかりの現代社会では、

ことが必要である。

問五 つぎの中から、本文の内容と合致しているもの一つを選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア ニュートンが「樹から落ちる林檎」をヒントに「万有引力の法則」を発見した例からも明らかのように、物理学や数学の偉大な発見も、理屈や筋道のない思考につらぬかれている。

イ 類似する関係にあるものを連想して問題の解決を得ることと、将来に応用できそうなアイデアを備えておくことは、共に役には立つが、逆の方向性をもつ発想による。

ウ 抽象的思考とは、一見無関係なものを関係づけていく高度な頭脳活動であり、アイデアが現実に使えるか使えないかという具体的思考と裏表の関係にある。

エ 自由にものを考えるためには、具体的な情報や知識にとらわれず、類似するイメージの連想に基づいて抽象的に思考することが必要である。

オ ビジネスで成功した人が「遊んでいるときに、新しい仕事のアイデアを思いつく」などと語ることが多いが、それは遊びとビジネスを異なる分野のものとして発想することの大事さを意味している。